

## 辰野登恵子展 を観て

岡谷市美術考古館では、8月20日～10月22日「没後5年辰野登恵子展 色彩と進化のプロローグ」が開催されています。9月7日には関連イベントとして、講演会とフリートークが行われ70人余りの方が参加されて盛況でした。

岡谷市出身の20回生の辰野さんは、当時二葉高校在職中の美術教師、二木六徳先生のご指導を仰ぐべく入学。その教えを受けて東京藝術大学に進み、同大学院を修了。1995年史上最年少45歳で東京近代美術館での個展を成功させ、女性画家として初めて毎日芸術賞を受賞するなど日本近代美術を牽引、活躍された画家です。

講演会は「愛でられた抽象-辰野登恵子の人と芸術」と題して、岡谷市湊出身で辰野さんにゆかりのある美術評論家の谷新さんによる、高校時代から晩年までの作品一点一点の意図や手法の解説がありました。「抽象は分からないけれど、辰野の作品は好き」という声を何度も聞いてきた、と谷さん。大衆消費社会における雑誌、広告、TV、映画などを主題としたポップアートや、最小限まで切りつめたミニマルアートに共鳴、影響を受け、多くの作品のモチーフになった、四角いタイルに象徴されるグリッドへの関心は、子供の頃からノートや原稿用紙が好きで、ただ見入っていたり、それに色を塗っていたことが始まりのようです。学生運動が吹き荒れた時代、伝統的な絵画や彫刻が批判の矢面に立たされ、イメージやイリュージョン（辰野さんは「振幅」と捉える）が否定され、ポップアートも批判的対象の一つであった中で、それら美術動向の主義主張に乗らずに、その独自性に溢れた作品を継続的に生み出してきた稀有な画家として、未来永劫に記憶されるだろうとのお話でした。

辰野さんが在学中に描いた文化祭のポスターは、鮮やかなピンクを用いた抽象的なデザインのととても印象的な作品で、後輩の私達も目にする機会がありました。油彩にとどまらず、シルクスクリーン、リトグラフ、エッチングや陶芸まで、幅広い分野の作品を制作されていたことにも驚かされました。今回高校時代の自画像を中心とした、10点余りの作品も展示されていて、その力強いタッチと深い色づかいに心が震えました。絵画に表れる力強さ、姉はそういう人でしたと言う、登恵子さんの弟さんの言葉が耳に残っています。

抽象画をどこか遠いもののように感じていた私ですが、谷さんのお話をお聴きして、辰野さんの没後直ぐに、やはり同館で企画された展覧会を観た時以上の深い感動を覚えました。都合でフリートークには参加できませんでしたが、改めて母校の先輩の偉業に触れることができた貴重な時間でした。

( 津金 記 )